

本薬師寺旧境内の調査

—第178-11次

1 はじめに

奈良文化財研究所では、住宅建設にともない、本薬師寺旧境内の発掘調査を実施した。今回の調査地は、中心伽藍の金堂跡からみて北西にあたり、平城京の薬師寺伽藍を本薬師寺に重ねてみた場合、西面僧房の位置に相当する。また、奈良文化財研究所がかつて調査をおこなった、本薬師寺1994-1次調査地や飛鳥藤原第143-3次調査地に隣接している。

2 調査概要

宅地の西辺および南辺に沿って、幅4mの調査区を「L」字形に設定した。南北長18.5m、東西長8.5mで、調査面積は92㎡である。

層 序

基本層序は、1 造成土、2 耕作土、3 流路の自然堆積、4 流路の基盤層の4層である。最上層(1)は、宅地の造成土である。造成土の下は、耕作土であり(2)、隣接する畑地と同じ標高にあたる。耕作土を除去すると、黄褐色の砂質土があり、この上面が藤原宮期の遺構面に相当すると考えられる(3、上層遺構面)。隣接する1994-1次調査地や143-3次調査地の遺構面の標高や堆積の状況とも矛盾はない。流路の基盤層は砂層であり(4、下層遺構面)、砂層の下ではシルトの厚い堆積を確認している。

遺 構

上層遺構面では、耕作溝や近現代に深掘りされた土坑および井戸を検出ただけであり、それらを掘削・除去しても、本薬師寺に関わる遺構は検出できなかった。下層遺構面では、南北2ヵ所で自然流路を検出した。

自然流路NR465 北側の自然流路である。基盤層の砂層上面からの深さ約0.4m、幅約3.0~3.5mであり、南西から北東方向に流れていたと考えられる。

自然流路NR466 南側の自然流路である。調査区内でX字状に交差して検出している。断面や断ち割りの観察では、北側の流路とは反対に東から西に流れており、流路の入り乱れた状況がうかがえる。南北の流路ともに、

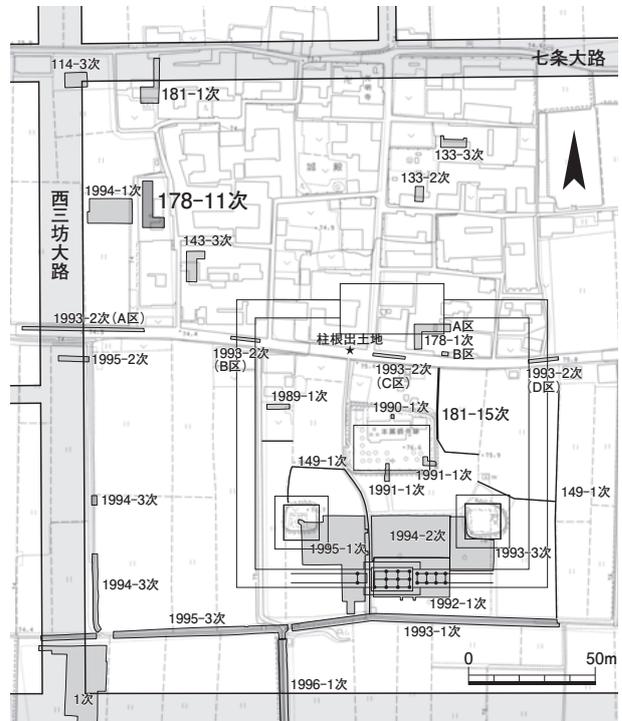


図149 第178-11次調査区位置図 1 : 3000

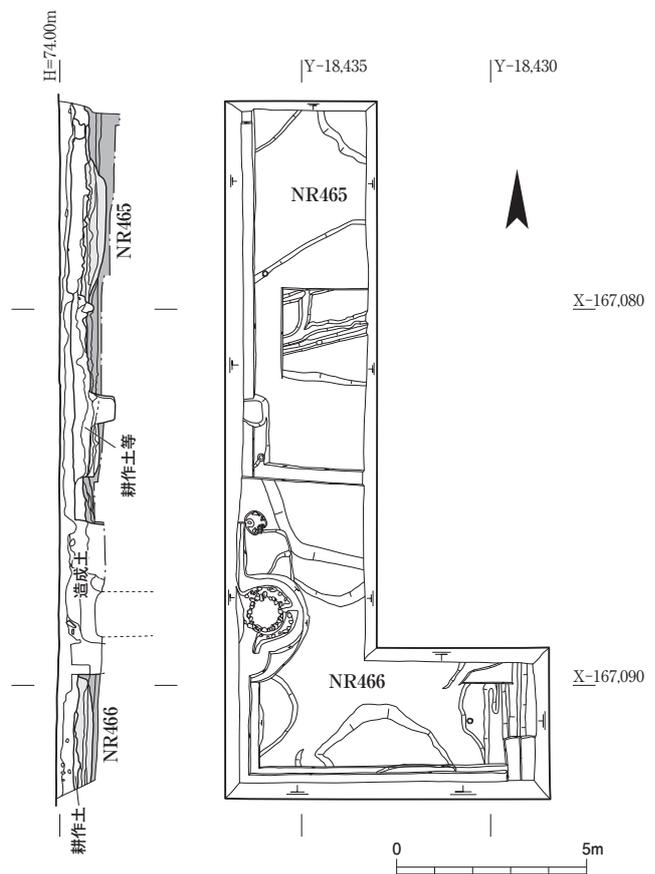


図150 第178-11次調査遺構図・土層図 1 : 200



図151 第178-11次調査区上層全景(北から)



図152 第178-11次調査区下層全景(北から)

確実に飛鳥時代をさかのぼるものである。

これらの流路が埋没する洪水堆積があった後、耕作等による改変がおこなわれて、最終的に飛鳥時代後半(藤原官期)の遺構面が形成されたと考えられる。

今回の調査地では、中世以降にも耕作がおこなわれたようであり、近現代になって宅地に改変されている。調査区西南で検出した井戸は宅地にもなうものであり、現代の造成によって埋められている。

3 出土遺物

調査地内では、土師器・須恵器・中近世土器はコンテナで1箱分、瓦は、コンテナで3箱分が出土している。すべて、上層の造成土・耕作土層からの出土である。

土器 飛鳥時代に位置づけられると考えられる須恵器・土師器類が出土しているが、大半が小片である。

瓦 本薬師寺創建に関わる遺物として、軒丸瓦では6276Aa・6276C型式が、軒平瓦では6647I・6641H・三重弧型式が出土している。その他に丸瓦・平瓦・面戸瓦が出土した。

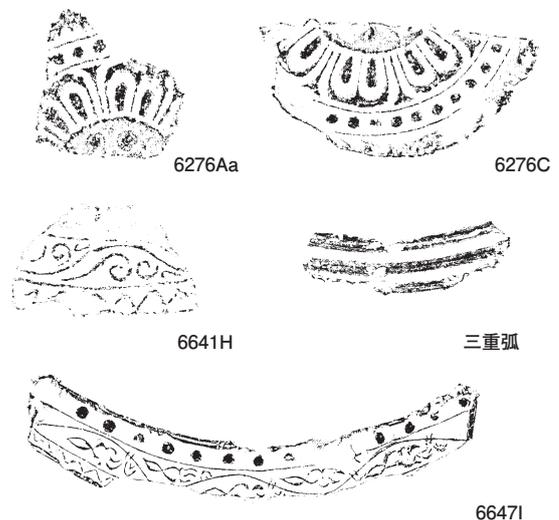


図153 第178-11次調査出土軒瓦 1:4

4 まとめ

今回の調査地では、本薬師寺に関わるような飛鳥時代後半に位置づけられる遺構は存在していなかった。隣接する既調査地も同様の状況であり、西面僧房推定地周辺は、遺構の希薄な現況であることが追認される結果となった。
(南部裕樹/東大寺・黒坂貴裕/文化庁)